

日本の名作名文ハイライト

魔術

芥川龍之介

朗読 小金洋子

出所 小金洋子の読み語り作品集

<http://www.voiceblog.jp/moe20040401/>

teabreak 編

魔術

芥川龍之介

●冒頭部分

ある時雨の降る晩のことです。私を乗せた人力車は、何度も大森界限の険しい坂を上ったり下りたりして、やっと竹藪に囲まれた、小さな西洋館の前に梶棒を下しました。もう鼠色のペンキの剥げかかった、狭苦しい玄関には、車夫の出した提灯の明りで見ると、インド人マテイラム・ミスラと日本字で書いた、これだけは新しい、瀬戸物の標札がかかっています。

マテイラム・ミスラ君といえば、もう皆さんの中にも、御存じの方が少くないかも知れません。ミスラ君は永年インドの独立を計っているカルカッタ生れの愛国者で、同時にまたハッサン・カンという名高い婆羅門の秘法を学んだ、年の若い魔術の大家なのです。私はちょうど一月ばかり以前から、ある友人の紹介でミスラ君と交際していましたが、政治経済の問題などはいろいろ議論したことがあっても、肝腎の魔術を使う時には、まだ一度も居合せたことがありません。そこで今夜は前もって、魔術を使って見せてくれるように、手紙で頼んで置いてから、当時ミスラ君の住んでいた、寂しい大森の町はずれまで、人力車を急がせて来たのです。

私は雨に濡れながら、覚束ない車夫の提灯の明りを便りにその標札

の下にある呼鈴の釦を押しました。すると間もなく戸が開いて、玄関へ顔を出したのは、ミスラ君の世話をしている、背の低い日本人の御婆さんです。

「ミスラ君は御出ですか。」

「いらっしやいます。先ほどからあなた様を御待ち兼ねでございました。」

御婆さんは愛想よくこう言いながら、すぐその玄関のつきあたりにある、ミスラ君の部屋へ私を案内しました。

「今晚は、雨の降るのによく御出でした。」

色のまっ黒な、眼の大きい、柔な口髭のあるミスラ君は、テーブルの上にある石油ランプの心を撚りながら、元気よく私に挨拶しました。

「いや、あなたの魔術さえ拝見できれば、雨くらいは何ともありません。」

私は椅子に腰かけてから、うす暗い石油ランプの光に照された、陰気な部屋の中を見回しました。

ミスラ君の部屋は質素な西洋間で、まん中にテーブルが一つ、壁側に手ごろな書棚が一つ、それから窓の前に机が一つ——ほかにはただ我々の腰をかける、椅子が並んでいるだけです。しかもその椅子や机が、みんな古ぼけた物ばかりで、縁へ赤く花模様を織り出した、派手なテエブル掛でさへ、今にもずたずたに裂けるかと思うほど、糸目が

露になっていました。

私たちは挨拶をすませてから、しばらくは外の竹藪に降る雨の音を聞くともなく聞いていましたが、やがてまたあの召使いの御婆さんが、紅茶の道具を持ってはいつて来ると、ミスラ君は葉巻の箱の覆を開けて、

「どうです。一本。」と勧めてくれました。

「難有う。」

私は遠慮なく葉巻を一本取って、燐寸の火をうつしながら、

「確かあなたの御使いになる精霊は、ジンとかいう名前でしたね。するとこれから私が拝見する魔術と言うのも、そのジンの力を借りてなさるのですか。」

ミスラ君は自分も葉巻へ火をつけると、にやにや笑いながら、※のいい煙を吐いて、

「ジンなどという精霊があると思ったのは、もう何百年も昔のことです。アラビヤ夜話の時代のことでも言いましょうか。私がハッサン・カンから学んだ魔術は、あなたでも使おうと思えば使えますよ。高が進歩した催眠術に過ぎないのですから。——御覧なさい。この手をただ、こうしさえすればいいのです。」

ミスラ君は手を挙げて、二三度私の目の前へ三角形のようなものを描きましたが、やがてその手をテーブルの上へやると、縁へ赤く織り

出した模様の花をつまみ上げました。私はびっくりして、思わず椅子をずりよせながら、よくよくその花を眺めましたが、確かにそれは今の今まで、テエブル掛の中にあつた花模様の一つに違いありません。が、ミスラ君がその花を私の鼻の先へ持って来ると、ちようど麝香か何かのように重苦しい※さえるのです。私はあまりの不思議さに、何度も感嘆の声を洩しますと、ミスラ君はやはり微笑したまま、また無造作にその花をテエブル掛の上へ落しました。もちろん落すともとの通り花は織り出した模様になって、つまみ上げること所か、花びら一つ自由には動かせなくなってしまうのです。「どうです。訳はないでしょう。今度は、このランプを御覧なさい。」

ミスラ君はこう言いながら、ちよいとテエブルの上のランプを置き直しましたが、その拍子にどういう訳か、ランプはまるで独楽のように、ぐるぐる回り始めました。それもちゃんと一所に止ったまま、ホヤを心棒のようにして、勢いよく回り始めたのです。初の内は私も胆をつぶして、万一火事にでもなつては大変だと、何度もひやひやしましたが、ミスラ君は静に紅茶を飲みながら、一向騒ぐ容子もありません。そこで私もしまいには、すっかり度胸が据ってしまつて、だんだん早くなるランプの運動を、眼も離さず眺めていました。

また実際ランプの覆が風を起して回る中に、黄いろい炎がたった一つ、瞬きもせずにともっているのは、何とも言えず美しい、不思議な

見物だったのです。が、その内にランプの回るのが、いよいよ速になって行って、とうとう回っているとは見えないほど、澄み渡ったと思いますと、いつの間にか、前のようにホヤ一つ歪んだ気色もなく、テエブルの上に据っていました。

「驚きましたか。こんなことはほんの子供一瞞しですよ。それともあなたが御望みなら、もう一つ何か御覧に入れましょう。」

ミスラ君は後を振返って、壁側の書棚を眺めました。やがてその方へ手をさし伸ばして、招くように指を動かすと、今度は書棚に並んでいた書物が一冊ずつ動き出して、自然にテエブルの上まで飛んで来ました。そのまた飛び方が両方へ表紙を開いて、夏の夕方に飛び交う蝙蝠のように、ひらひらと宙へ舞上るのです。私は葉巻を口へ銜えたまま、呆気にとられて見ていましたが、書物はうす暗いランプの光の中に何冊も自由に飛び回って、一々行儀よくテエブルの上へピラミッド形に積み上げました。しかも残らずこちらへ移ってしまったと思うと、すぐに最初来たのから動き出して、もとの書棚へ順々に飛び還って行くじゃありませんか。

が、中でも一番面白かったのは、うすい仮綴じの書物が一冊、やはり翼のように表紙を開いて、ふわりと空へ上りましたが、しばらくテエブルの上で輪を描いてから、急に頁をざわつかせると、逆落しに私の膝へさっと下りて来たことです。どうしたのかと思って手にとって

見ると、これは私が一週間ばかり前にミスラ君へ貸した覚えがある、フランスの新しい小説でした。

「永々御本を難有う。」

ミスラ君はまだ微笑を含んだ声で、こう私に礼を言いました。もちろんその時はもう多くの書物が、みんなテエブルの上から書棚の中へ舞い戻ってしまっていたのです。私は夢からさめたような心もちで、暫時は挨拶さえできませんでしたが、その内にさっきミスラ君の言った、「私の魔術などというものは、あなたでも使おうと思えば使えるのです。」という言葉を思い出しましたから、

「いや、兼ね兼ね評判はうかがっていましたが、あなたのお使いなさる魔術が、これほど不思議なものだろうとは、実際、思いもよりませんでした。ところで私のような人間にも、使って使えないことのないと言うのは、御冗談ではないのですか。」

「使えますとも。誰にでも造作なく使えます。ただ——」と言いかけてミスラ君はじっと私の顔を眺めながら、いつになく真面目な口調になって、

「ただ、欲のある人間には使えません。ハッサン・カンの魔術を習おうと思ったら、まず欲を捨てることです。あなたにはそれができますか。」

「できるつもりです。」

私はこう答えましたが、何となく不安な気もしたので、すぐにまた後から言葉を添えました。

「魔術さえ教えて頂ければ。」

それでもミスラ君は疑わしそうな眼つきを見せましたが、さすがにこの上念を押すのは無様だとも思っただけでしょう。やがて大様に領きながら、

「では教えて上げましょう。が、いくら造作なく使えると言っても、習うのには暇もかかりますから、今夜は私の所へ御泊りなさい。」

「どうもいろいろ恐れ入ります。」

私は魔術を教えて貰う嬉しさに、何度もミスラ君へ御礼を言いました。が、ミスラ君はそんなことに頓着する気色もなく、静に椅子から立上ると、

「御婆サン。御婆サン。今夜ハ御客様ガ御泊リニナルカラ、寢床ノ仕度ヲシテ置イテオクレ。」

私は胸を躍らしながら、葉巻の灰をはたくのも忘れて、まともには石油ランプの光を浴びた、親切そうなミスラ君の顔を思わずじっと見上げました。